

目的 食生活に関する民間伝承は、古くからの生活実践のつみ重ねにより、信頼され、共感を生みだしながら育てられてきた。しかし、最近、食生活が著しく多様化し、調理済み食品、加工食品が氾濫するなかで、食生活に関する民間伝承は消えようとしている。そこで、食生活に関する民間伝承が、祖母世代、母世代、学生世代にどのように伝承されているか、またどのように実践されているかを明らかにするために調査検討を行った。

方法 調査用紙の質問項目は、民間伝承のなかから、直接食生活に関係あるものを収集し、これらのなかから55項目を選定し、栄養、味、薬効、材料、食事作法、調理法などの6領域にまとめた。調査対象者は安田女子短期大学家政科学生とその家族、知人の合計572名、調査期間は昭和61年7月から同年9月までであった。

結果 祖母、母、学生の子世代間に伝承の程度に有意の差が認められ、祖母世代、母世代、学生世代の順に伝承は減少し、特に学生世代への伝承は⑬「より越しの茶は飲むな」、⑭「餅七度洗えば鯛の味」、⑮「酒のかんは人肌」、⑯「ぬかみそは日に三度煮からませろ」などにおいて減少が著しかった。領域別にみると、味、食事作法など自分の行為に関するものがよく伝承され、食物の薬効、材料などに関するものは、栽培方法、包装、輸送、医薬品などの進歩により、身近に感じられなくなったせいがある。さらに家庭での実践についてみると、祖母、母、学生世代共に、⑰「移りばしはいけぬ」、⑱「食うてすぐねると牛になる」、⑲「調味料の入れ方さ・し・す・せ・そ」、⑳「炊けのこに米ぬか」などが比較的よく伝承され実践されている。